

口頭発表場面における スピーチ不安について

岡 部 悦 子

キーワード

口頭発表場面 スピーチ不安 コミュニケーション不安
状況不安 第二言語不安

1. はじめに

留学生が日本で学業を続けていくためには様々なコミュニケーション能力が必要であるが、特に「話す能力」の中で養成すべき能力として、下瀬川（1994:151）は、(1)学術習得のために必要な口頭発表力、(2)学内外で必要な交渉の場での対応説得技術の習得、という2種類をあげている。一方、「話す能力」の教育が重視されるのに伴い、音声面に関する学習活動と学習者の心理状態との関係に注目が集まっている。第二言語の学習や使用、習得に特定的に関わる不安や心配と、それによって引き起こされる緊張や焦りは、「第二言語不安」と呼ばれているが（元田2000b:34）、口頭発表は学習活動の中でも不安の大きいものであると考えられている。

「大勢の人の前で話すときは緊張する」「あがってしまう」というような心理状態は、「スピーチ不安¹⁾ (Speech Anxiety)」とよばれ、心理学やコミュニケーション学においては「コミュニケーション不安²⁾ (Communi

1) 聴衆の面前で話をする時に感じる不安のこと。高橋編（1999）『音声言語指導大事典』p. 341-342

2) 実際の、あるいは想像上の対人コミュニケーションに関連した恐怖あるいは

cation Apprehension)」の一分野として、1970年代から様々な研究が行われてきた。スピーチ不安は第二言語を使用する場面のほか、母語を使用する場面でも多くの人々が体験するコミュニケーション不安の1つであると考えられている。

学習者の心理状態を考慮すれば、口頭発表に関する学習は勉強を続ける上で必要性の高いものであるが、心理的には大変負担の大きいものといえる。そのため学習の効果を高めるためには、学習者の心理状態に配慮した指導が求められると思われる。また心理的負担が大きい中で、いかに言語表現をコントロールしていくかという観点から、口頭発表能力の育成のためには言語面と情意面の統合的な研究が必要ではないかと思われる。岡部(2000)では、日本語学習者の口頭発表場面の言語表現に対する日本語母語話者の違和感の調査を行ったが、その際には日本語学習者の情意面について十分な考察ができなかった。その反省を踏まえ、本研究では将来的に日本語教育へ応用することを念頭におき、口頭発表場面におけるスピーチ不安について、日本語母語話者の感じる不安と日本語学習者の感じる不安を、アンケート調査を通じて比較することで、その性質の差について考察を試みる。また、同時に口頭発表に対する学習観、口頭発表場面で用いられる言語表現に対する意識など、口頭発表の学習に関連する周辺意識についても調査を行い、スピーチ不安を考察する際の参考とする。

2. 先行研究と本研究の位置付け

スピーチ不安に関する研究を概観すると、母語教育(国語教育)の一環として母語話者を対象にした研究と、外国語(第二言語)教育の一環として学習者を対象にした研究の大きく2つの流れがある。

スピーチ不安の研究は、1970年に McCroskey により、母語での口頭発表場面の教育に応用することを目的に、コミュニケーション不安の一分野

不安のレベル。〈McCroskey (1984) ; 近藤・ヤン (1996) 〉

として研究が始められた。McCroskey は「コミュニケーション不安に関する自己報告 (Personal Report of Communication Apprehension; PRCA)」という質問紙法により、小グループでの討論・集会での発言・会話・スピーチ場面に対する個人のもつ特性不安を測定する尺度を考案した³⁾。Daily (1991:12) は McCroskey の研究を踏まえた上で、スピーチ不安の要因として、「スピーチの形式に対する固定概念 (rule rigidity)」, 「スピーチ時の心理状態に対する固定概念 (the labels people apply to the arousal they experience when speaking)」, 「聴衆との意識の差異 (the heterogeneity of the audience)」などをあげている。⁴⁾

その後も母語話者を対象としたスピーチ不安の研究は、「不安の高い者と低い者の違いは何か」という特性不安としての関心から研究が続けられ、近年の日本人を対象とした研究としては、治療施設に通うスピーチ不安者を対象とした市井 (1990)、日本人大学生を対象にした小泉 (1997)、宮前 (2000)、日本人中学生を対象とした神部・井上 (1997) などがある。市井 (1990) はスピーチ予告後の心理状態を質問紙法と心拍数によって調査したものの、小泉 (1997) はスピーチ場面のイメージの評定を質問紙法によって調査したものであるが、これらの調査ではスピーチ不安には生理的知覚が関連しているという見解を示している。一方、神部・井上 (1995) の質問紙法による調査、宮前 (2000) の心拍数・質問紙法・スピーチ後の思考の書き出しによる調査では、過去の失敗や成功の経験や学習意欲などの影響によって、発表やスピーチに対する認知がスピーチ不安に関連しているという見解を示している。特に宮前 (2000:177) では、高スピーチ傾向者と低スピーチ傾向者は、スピーチ場面では同様の生理的反応を経験するが、不安及び認知において違いが表れるとし、スピーチ不安傾向の高い者と低い者とでは主観的側面には違いが認められるが、生理的

3) McCroskey (1970), 近藤・ヤン (1996)

4) 日本語訳は筆者による

側面には違いが見られないと述べている。

外国語（第二言語）としての日本語教育に関する研究では、日本語学習に伴う不安尺度の作成に関する元田（2000a,b）の調査などにおいて、教室活動の中では口頭発表が最も不安が高いという報告がなされている。また「話す」という言語活動に関連して、小河原（2001）の日本語学習者を対象に日本語発音を扱った研究では、不安要因として場面による影響はあまりみられず、「発音スキルの欠如」や、他の学習者による評価や存在を意識することによる「他者評価」「自他評価」が発音不安に起因するとしている。

以上、現在までの先行研究を概観してみると、母語教育においても外国語教育においても「人前で話す」という状況が緊張感を生み、不安を与えていると考えられる。これはスピーチ不安がコミュニケーション不安の研究の中で「状況不安」⁵⁾に分類されていることからいわば当然のことなのかもしれないが、その不安の質は母語場面と第二言語場面とで同じであるのか、それとも異なるのか、という点についてはまだ明確ではないように思われる。また、第二言語を使用する場面ではスピーチ不安が大きいのことは指摘されているものの、それは第二言語を使用する場面全体に対する指摘であり、口頭発表場面という特定の場面を対象にして、学習者は何に対して不安を感じているのかというような、スピーチ不安の具体的な内容についてもまだ明らかにされていないと思われる。もし学習者が不安を抱いている対象が少しでも明らかになれば、口頭発表場面の指導の際に何を指導すべきか、またどのように指導すべきかを考える上で参考になるのではないだろうか。

そこで本稿では、将来的に日本語教育での口頭発表場面の指導に生かすことを念頭におき、第二言語場面におけるスピーチ不安の性質をより明ら

5) マクロフスキー（McCroskey）が4分類したコミュニケーション不安のうちの1つ。ある特定の対人コミュニケーション状況に対して人が不安を経験する継続的な性格傾向のこと。〈近藤ほか（1996）を参考。〉

かにするために、日本語学習者と日本語母語話者のスピーチ不安の比較を試みる。また本稿では、質問紙法によってスピーチ不安に対する認知を調査する手法をとり、生理的な知覚については考察の対象としないことにする。

3. 研究方法

3-1 研究目的

本研究では、調査・分析を通じて、以下の3点について考察することを目的とする。

まず、第1の目的は、日本語でスピーチ・口頭発表・質疑応答をするといった、日本語使用環境におけるスピーチ不安について、日本語母語話者の抱くスピーチ不安と、日本語学習の抱くスピーチ不安とでは、どのような違いがあるのか比較を行う。

元田(2000a,c)の第二言語不安に関する調査によれば、日本語のレベルが不安に関与している可能性があり、ほとんどの不安の有意差が初・中級と上級の間にみられ、いずれも初・中級が上級よりも不安得点が高いという結果が報告されている。本研究でも、第2の目的として、スピーチ不安と日本語レベルとの関係について考察を試みる。岡部(2002)では、口頭発表場面における言語表現に対する意識を、①日本国内の大学機関が設置する留学生別科で日本語を学習している中上級レベルの日本語学習者(以下、中上級者)、②日本国内の大学院に在籍し、日本語による研究活動を行っている留学生(以下、超級者)、③日本国内の大学・大学院に在籍し、日本語による研究活動を行っている日本語母語話者(以下、母語話者)の3つのグループ⁶⁾を対象に調査を行った。本研究でも引き続き、この3つのグループを対象に、スピーチ不安と日本語レベルとの関係につい

6) 日本語学習者の超級・中上級というレベル分けは今回の調査のためのもので、ACTFL-OPIによって判定を行ったものではない。

て調査・分析した結果を行う。

最後に、口頭発表場面に関連する学習を1つの教育活動として考えた場合、その実践方法としては実際にスピーチや発表を行うことのほか、口頭発表で使用する言語表現の学習や、テーマを決めて話す内容や原稿を準備するといった事前の活動、スピーチ・発表を聞いたあとに感想や質問を述べたり、それらに応答するといった事中の活動、また教師による講評や学生同士の相互評価を行うといった事後の活動を伴うことが多いように思われる。本研究では第3の目的として、これらの口頭発表場面に関する教育活動全体を視野に入れ、幅広く学習者の不安や意識を調査することを通じて把握することを試みる。そして、スピーチ不安の考察や将来的な日本語教育への応用を考える際の参考とする。

3-2 調査方法

日本語使用環境におけるスピーチ不安と口頭発表場面に伴う諸活動に対する意識を調査するために、以下の4種類からなる調査項目を作成した⁷⁾。

(1) 経験・必要性・学習意欲に関する項目〈調査項目；1～3〉

神部・井上(1997)では、学習意欲の高い者はスピーチ不安が低い傾向があると報告されている。今回の調査対象者のスピーチ不安を考察する上での参考資料として、発表・スピーチの経験・必要性・学習意欲に関する質問を3項目作成し、調査を行った。

(2) 言語表現に関する項目〈調査項目；4～10〉

口頭発表場面では、日常生活の「おしゃべり」と比較して、スピーチレベル⁸⁾が高くなるため、それに伴って表現形式もスピーチレベルに合うよ

7) 調査項目の詳細は、稿末の資料「口頭発表場面のスピーチ不安に関する調査項目、及び結果一覧」を参照されたい。

8) ある「談話」において選択される「表現の待遇度」のことを「スピーチレベル」と規定する。岡部・蒲谷(2000) p.112

うに調整しなければならない。このような言語表現の運用の難しさがスピーチ不安に関係している可能性もあると考え、中上級者・超級者に対して口頭発表場面で使用される言語表現全体に対する印象について5項目の設問、そして母語話者・中上級者・超級者全員に対して言語表現への価値観をたずねる設問を2項目設定した。岡部（2002）では、岡部・蒲谷（2000）での分析に基づき、口頭発表場面のスピーチレベルの維持に関わる言語表現の運用意識を調査するために、その代表的な表現の使用方法をたずねる設問を作成したが、今回は口頭発表場面のスピーチレベル全体に対する話者のイメージを調査することを目的とした。

(3) 事前準備活動に関する項目〈調査項目；11～14〉

スピーチ不安を軽減するための指導方法として神部・井上（1997）は、「失敗経験がSP不安と相関が高いことも考え併せると、発表してよかったという感想をもたせるような事前の配慮が必要である。すなわち、本発表までに十分な準備の時間を取る。」ことを提案し、例として「友達が聞きたいことは何か」のアンケート調査や話の工夫、練習時間の確保などをあげている⁹⁾。しかし、実際に発表・スピーチをする以前の準備作業自体が学習者にとっては負担になり、学習意欲を低下させる要因になる恐れはないのだろうか。このような考えから、スピーチ不安の間接的な要因として、事前準備活動に関する設問を2項目作成した。中上級者・超級者に対しては母語による活動との比較を問う設問を2項目加え、4項目とした。

(4) 事中・事後活動に関する項目〈調査項目；15～33〉

口頭発表場面で実際に「話すこと」を中心に、それに伴う事中・事後活動に関する設問を19項目作成した。これらの項目は、中上級者・超級者・

9) 神部・井上（1997）p.433 「SP不安」とは「スピーチ不安」の簡略表記である。

母語話者全員に対して共通のものである。項目を作成する際には、元田(2000a, b, cほか)の調査・研究で作成された「日本語不安尺度(JLAS; Japanese Language Anxiety Scale)」の中から、口頭発表場面と特に関わりの深い項目を借用し、今回の調査にあうよう一部手を加えて使用した。

以上、4種類からなる調査項目を、日本語母語話者を対象に26項目、中上級者・超級者を対象に33項目作成し、4段階評定で回答を求めた。調査は「日本語による発表・スピーチに関する調査」の一部として、日本国内の大学で調査者が直接該当者に調査を依頼する方法と、日本語教育関係者に調査を委託する方法を併用し、2001年7月から8月にかけて実施した。

3—3 仮説

本研究を調査・分析するにあたり、以下の仮説を設定した。

- ① 口頭発表場面におけるスピーチ不安は、日本語能力によって差があるのではないか。
- ② 本調査では中上級者の抱くスピーチ不安が最も大きく、次いで超級者・母語話者の順に不安は小さくなるのではないか。
- ③ スピーチ不安は学習の意欲や態度にも影響し、スピーチ不安の大きいものは口頭発表場面に伴う様々な学習活動や言語表現に対しても否定的な印象を抱くのではないか。

4. 調査結果

4—1 分析方法

回収した調査票の中から、回答に欠損値がなかった87名(母語話者41名、超級者22名、中上級者24名)の結果を分析の対象とした。また今回の調査では、中上級者・超級者に対して母語と日本語との言語活動を比較する質問項目を設定したことから、日本語母語話者以外の対象者は中国語母語話者、韓国語母語話者に限定した。対象者の母語別の内訳は、日本語母

語話者41名、中国語母語話者23名、韓国語母語話者23名である。

今回の調査では母集団が小さく、日本語レベル別に集計した際に調査結果が正規分布にならなかったことから、グループ間の差の検定にはノンパラメトリック検定の手法を用いることにした。データの処理には、SPSS Base 11.0J を使用した。

4-2 結果・考察

調査の結果は、稿末の資料にまとめた。以下、調査項目の種類ごとに報告する。

(1) 経験・必要性・学習意欲に関する項目

〈項目1～3〉では、日本語による発表・スピーチの経験・必要性・学習意欲について調査した。回答方法は4段階評定であるが、ここではその他の項目とは異なり、具体的な回数や事例を示して選択する方法をとった。

結果をみると、発表・スピーチの「経験」〈項目1〉、「必要性」〈項目2〉、「学習意欲」〈項目3〉ともに、母語話者、超級者、中上級者の順に高くなっている。〈項目1〉の「経験」については、母語話者・超級者には未経験者はいなかったが、中上級者は①未経験者から③日本語のクラスでよくするまで、回答が分かれた。対象者とした3つのグループ間の差をクラスカル・ウォリスの検定を行ったところ、3項目とも有意差があった。さらに多重比較により、「経験」〈項目1〉・「学習意欲」〈項目3〉では母語話者・超級者と中上級者の間に、「必要性」〈項目2〉では母語話者と中上級者の間に差があることが認められた。以上のことから、発表・スピーチに対する意識は、大学や大学院で学ぶ者と、日本語の予備教育を受けている者との間にはっきりとした差があることがわかる。現在の学習に必要性を感じている母語話者・超級者、将来の学習に必要性を感じている中上級者、ともにそれぞれの学習環境を反映する結果になったと思

われる。

(2) 言語表現に関する項目

〈項目4～10〉では、発表・スピーチで使用される言語表現に関する意識について、〈項目4～8〉では超級者と中上級者に対して母語との違いについて、〈項目9, 10〉では全員を対象に発表・スピーチの言語表現に対する価値観について調査を行った。設問の内容は、①「そう思う」寄りの回答が多いほど母語との差を感じている、④「まったくそう思わない」寄りの回答が多いほど母語との差を感じていない、という結果になるように構成した。

〈項目4～8〉では、日本語能力別（超級者と中上級者）、また母語別（韓国語母語話者と中国語母語話者）に2つのグループ間の差を調べるために、マン・ホイットニー検定（両側検定）を行った。その結果、まず日本語能力別では〈項目5〉「表現がちがう」、〈項目6〉「構成がちがう」で有意差があり、いずれも超級者のほうが中上級者に比べ、①「そう思う」②「ややそう思う」という差を指摘する回答が多かった。〈項目4〉「発表のスタイルがちがう」、〈項目7〉「敬語や改まった表現が多い」、〈項目8〉「間接的な表現が多い」に関しては、有意差が認められなかった。一方、これらの項目について同様の方法で母語別に検定を行ったところ、〈項目7〉「敬語や改まった表現が多い」の回答に有意差が認められ、中国語母語話者のほうが韓国語母語話者に比べ、①「そう思う」という回答が多いという結果になった。

以上の結果から考察すると、口頭発表場面では日常的な会話に比べてスピーチレベルが高くなるが、この点については〈項目7〉「敬語や改まった表現が多い」、〈項目8〉「間接的な表現が多い」で超級者・中上級者ともに①「そう思う」と②「ややそう思う」を選択した比率が70%前後に達しており、意識的に理解されていると思われる。これは岡部（2002）での調査においても、「敬語」や「文体敬語」の選択率が母語話者に比べて高

い傾向がみられたが、今回の結果も日本語学習者のスピーチレベルに対する高い認識を反映していると思われる。また超級者の場合は、スピーチレベルの違いがはっきりと表れる敬語の以外の表現や構成などについても、母語との違いをはっきりと理解し、中上級者と比べ言語表現を切り替えるという意識ができていていると考えられる。岡部（2002）の調査でも、中上級者と超級者の言語表現の選択意識の差は「特に話し言葉的性質をもつ語彙・表現の選択」や「説明や表現の正確さ、明確さに関わる言語表現の選択」にあらわれていた。母語と目標言語とを対照しながら分析・使用するというということは、学習ストラテジーの観点から見ると、認知ストラテジーに該当する。フォーマルスピーチとインフォーマルスピーチの違いは単に待遇表現や敬体・常体の違いだけではなく、表現上（改まった言い方、砕けた言い方）の違いも伴う（鎌田（2001:59-58））が、スピーチレベルの変化は構成から表現の細部まで様々な要素にも影響するということをごどこまで意識しているかという認知ストラテジーの使用は、日本語能力と関わりがあると思われる。

母語別の比較では、〈項目7〉「敬語や改まった表現が多い」に対し、中国語母語話者の場合、①「そう思う」②「ややそう思う」という回答が91.3%に達し、この数字は韓国語母語話者の回答（①、②の合計42.1%）の2倍以上に相等する¹⁰⁾。日本国内の日本語教育においては、中国語母語話者・韓国語母語話者の学習者の比率が大変高いが、待遇表現に対する意識が異なることから、それぞれの母語や母文化に対する配慮が何らかの形で必要ではないかと思われる。

10) 母語別の結果は次の通り。単位：人（ ）内は比率を示す。中国語母語話者：①「そう思う」16（69.6%）、②「ややそう思う」5（21.7%）、③「あまりそう思わない」2（8.7%）、④「まったくそう思わない」0（0%）
韓国語母語話者：①「そう思う」3（13.0%）、②「ややそう思う」9（39.1%）、③「あまりそう思わない」9（39.1%）、④「まったくそう思わない」2（8.7%）

言語表現に関する項目の中に、口頭発表場面の言語表現への価値観を調査する項目を作成した〈項目9, 10〉。回答の形式は、①「そう思う」寄りの回答が多いほどスタイル、文法・表現の規範性を重視する傾向、④「まったくそう思わない」寄りの回答が多いほど意見の内容を重視する傾向となるように作成した。検定の結果、グループ間に有意差はみられなかったが、母語話者・超級者・中上級者ともに、回答の50%以上が③「あまりそう思わない」④「まったくそう思わない」に集中し、全体的に発表やスピーチの規範性を重視する傾向がみられた。特に超級者は、③「あまりそう思わない」④「まったくそう思わない」の回答が〈項目9〉では72.7%、〈項目10〉では91%に達しており、スタイルや文法・表現への規範性を守る意識が非常に強いといえると思われる。

(3) 事前準備活動に関する項目

〈項目11~14〉では、発表・スピーチに伴う事前活動についての設問を作成した。〈項目11, 12〉は超級者・中上級者を対象に母語で行う場合との比較をたずね、その結果を日本語能力別と母語別に検定を行ったが、どちらにも有意差は認められなかった。〈項目11〉「母語で行う時より時間がかかる」に対する回答は、超級者・中上級者ともに①「そう思う」が50%以上となった。また〈項目12〉「母語で考えてから翻訳する」でも①「そう思う」という回答がなく、③「あまりそう思わない」が50%以上という結果なり、超級者・中上級者に同様の傾向がみられる。

一方、母語話者・超級者・中上級者全員を対象とした〈項目13〉「日本語の資料を調べることが負担になる」、〈項目14〉「話すことは紙に書いておく」の結果について検定を行ったところ、10%の有意水準で有意傾向が認められた。母語話者・超級者と比べ、中上級者に①「そう思う」②「ややそう思う」という回答が多く、これらの回答の比率は〈項目13〉では50%、〈項目14〉では62.5%となっている。

以上の結果から、超級者・中上級者ともに口頭発表場面の学習につい

て、準備に時間がかかるという認識では一致しているものの、中上級者の方が超級者に比べて事前活動に負担を感じていると考えることができると思われる。口頭発表場面の学習では、実際に「話すこと」が目的であるため、「話すこと」に教師の指導や評価が集中しがちであるが、言語能力の低い学習者にとっては「話すこと」の前に負担や不安を多く抱えているように思われる。神部・井上（1997）や田中（2001）では、中学生・高校生対象の国語教育の研究・実践から、発表・スピーチで成果をあげるには入念な事前準備が大切であると述べているが、日本語教育の場合、学習者が「話すこと」に対する自信と成果を実感できるようになるためには、どのように事前活動も含めて口頭発表場面の学習環境を整えていくべきか、学習者の負担や不安も踏まえながら、今後さらに検討していく必要があると思われる。

(4) 事中・事後活動に関する項目

〈項目15～33〉では、実際に発表・スピーチを行う場面に対してどのような意識をもっているか、また聞き手からの評価や発表・スピーチの直後に行われることが多い質疑応答場面に関する項目も含めてスピーチ不安に関する設問を作成したことから、「事中・事後活動に関する項目」と呼ぶことにする。設問は全19項目で、1) 一般的な発話活動に関する項目〈項目15, 16〉, 2) 発話処理に関する項目〈項目17～23〉, 3) 他者からの評価に関する項目〈項目24～29〉, 4) 質疑応答場面に関する項目〈項目30～33〉の4つの種類の設問を作成した。元田（2000b）の調査結果によれば、日本語学習者の教室内活動に対する日本語不安は「発話活動における緊張」「状況不確かさに対する不安」「低い日本語力に対する心配」の3因子からなるという結果が報告されているが、本研究でもこれらの結果を参考に口頭発表場面におけるスピーチ不安を調査する項目を作成した。なお、事中・事後活動に関する項目は、母語話者・超級者・中上級者全員に対して共通の項目とした。項目作成にあたっては、①「そう思う」が多い

ほどスピーチ不安が大きい傾向、④「まったくそう思わない」が多いほどスピーチ不安が小さい傾向がみられるようにした。

回答の結果に対して検定を行ったところ、〈項目15, 16, 21, 23, 28, 33〉の6項目に有意差が、また〈項目19, 25〉の2項目に有意傾向が認められた。以下、項目の種類ごとに結果を報告する。

1) 一般的な発話活動に関する項目では、〈項目15〉「ふだんから、日本語で話すときは緊張する」については多重比較の結果、超級者と中上級者の間に差が認められた。また、〈項目16〉「多くの人の前で日本語で話すときは緊張する」については多重比較の結果、日本語母語話者と超級者の間に差が認められた。仮説では、日本語母語話者→超級者→中上級者という日本語能力の順に不安が低くなるのではないかと予想したが、調査の結果、①「そう思う」と回答した日本語母語話者の比率は超級者より高く、〈項目16〉「多くの人の前で日本語で話すときは緊張する」において①「そう思う」と回答した比率は、日本語母語話者が53.7%で、超級者の18.2%、中上級者の41.7%という比率を上回る結果となった。以上の結果から、スピーチ不安の要因は、単に日本語能力だけの問題ではないということができると思われる。

次に、2) 発話処理に関する項目では、多重比較の結果〈項目21〉「文法的に正しい日本語を話せるかどうか心配する」と、〈項目23〉「正しい発音で日本語を話せるかどうか心配する」においては、超級者・中上級者と母語話者の間に差が認められた。また〈項目19〉「自分の性格（パーソナリティ）はかわってしまう」では、有意傾向がみられた。これらの結果から、発話処理中の不安については、中上級者・超級者は文法や発音など「日本語の正しさ」に不安を抱いているということができ、元田（2000b）で指摘された日本語不安の因子の1つである「低い日本語力に対する心配」の存在を裏付けるものといえる。一方日本語母語話者に「自分の性格（パーソナリティ）はかわってしまう」という回答が多かったのは、「多くの人前で話す」という状況そのものから感じる「状況不安」であ

り、超級者・中上級者の感じる「第二言語不安」とは性質のことなる不安ではないかと推測できる。

3) 他者からの評価に関する項目では、〈項目25〉「他の留学生から日本語が下手だとおもわれないか心配する」で有意傾向がみられ、また〈項目28〉「聞き手が自分の日本語を理解してくれているかどうか心配する」で有意差があり、多重比較の結果日本語母語話者と中上級者・超級者の間に差が認められた。これらの回答の傾向から、超級者・中上級者には発話処理における不安の場合と同様に、「日本語の正しさ」について聞き手がどのように感じているかについて不安をもっていると考えられる。〈項目24〉の「日本人からの評価」や〈項目26〉の「先生からの評価」に比べて、〈項目25〉「他の留学生からの評価」において母語話者と超級者・中上級者との差があらわれた要因の1つには、小河原(2001)でも指摘されているように、他の学習者の存在を強く意識し、自分の能力と比較を行う「自己比較」が影響しているのではないと思われる。それに対して、日本語母語話者の場合は、自分の話したことがきちんと伝わっているか、「聞き手の理解」について不安をもっていると思われ、この点においても母語話者の不安の質と中上級者・超級者との不安の質の違いが表れていると考えられる。

4) で取り上げた質疑応答場面は、発表・スピーチのように事前準備ができないことに加え、その場で即座に応答しなければならないものであるため、日本語能力が低いほど情報処理活動に負担と不安を感じるのではないかと予想したが、〈項目30〉「準備していないことを質問されると緊張する」、〈項目31〉「準備していないことを質問されるといいことがうまく言えない」、〈項目32〉「何回言ってもわかってもらえないときあせる」の3項目で①「そう思う」という回答の比率は、母語話者が最も高かった。検定の結果、〈項目33〉「日本語が聞き取れず、不安になる」で有意差がみられ、多重比較では超級者と中上級者の間に差が認められた。以上の結果から、質疑応答場面では聴解力に関する不安については日本語能力が

影響し、発話処理については日本語能力よりも、その場の状況に対する不安が影響しているのではないと思われる。

以上の結果から、口頭発表場面のスピーチ不安について、日本語母語話者・日本語学習者はいずれも不安を感じているが、その性質は異なり、日本語母語話者の場合は多くの人の前で話すという状況に対して緊張し、発話処理などに影響する「状況不安」を、日本語学習者は、多くの人の前で「正しい日本語」が話せるかどうかを不安に思う、「第二言語不安」を感じていると考えられる。

5. まとめ

本研究では、口頭発表場面におけるスピーチ不安について、(1)口頭発表場面の経験・必要性・学習意欲、(2)口頭発表場面の言語表現に対する意識、(3)口頭発表場面の学習に伴う事前準備活動に対する意識、(4)口頭発表場面の事中・事後活動に対する意識の4つの側面から考察を試みた。調査の結果をまとめると、以下のようになる。

(1) 口頭発表場面の経験・必要性・学習意欲では、発表・スピーチの経験が多く、また現在も必要としている母語話者・超級者と、発表・スピーチの経験が少なく、将来的な必要性を感じている中上級者との間に意識の差がみられ、それぞれの対象者の学習環境を反映する結果となった。

(2) 口頭発表場面の言語表現に対する意識では、中上級者は「敬語や改まった表現が多い」と感じ、スピーチレベルの高さを強く意識している傾向、超級者の場合は、他の場面と比較し、口頭発表場面の言語表現では様々な表現上の違いや、構成の違いを中上級者より意識している傾向がみられた。言語表現に対する価値観については、母語話者・超級者・中上級者ともに、単に自分の意見を伝えればよいというだけでなく、日本語のスタイルや文法・表現などの規範性に対する意識が高いことがわかった。

(3) 口頭発表場面の学習に伴う事前準備活動に対する意識では、超級者・中上級者ともに、母語で行う場合と比較して準備に時間がかかるとい

う回答が多く、特に中上級者は母語話者・超級者に比べて、日本語の資料を調べたり読んだりすることに負担を感じているという結果がみられた。

(4) 事中・事後活動に関する項目として口頭発表場面に関するスピーチ不安を調べたところ、日本語母語話者・日本語学習者はいずれも不安を感じているが、日本語母語話者の場合は多くの人の前で話すという状況に対して緊張するという「状況不安」を、日本語学習者は、多くの人の前で「正しい日本語」が話せるかどうかを不安に思う、「第二言語不安」を感じているということがわかった。

以上の結果から、本研究の目的を改めて振り返ってみたい。第1の目的は日本語母語話者のスピーチ不安と日本語学習者のスピーチ不安との比較を行うことであった。この点については、(4)の考察から、日本語母語話者のスピーチ不安は「状況不安」、また日本語学習者のスピーチ不安は「第二言語不安」とであるという性質の違いがあるということがわかった。

次に第2の目的は、スピーチ不安と日本語能力との関係について考察することであった。仮説では、日本語能力とスピーチ不安の大きさが反比例するのではないかと予想したが、日本語母語話者と日本語学習者との不安の性質が異なるため、その不安の大きさの差が日本語能力の差によるものであるとは直接断定することは難しい。しかし、超級者・中上級者という日本語学習者間で比較を行った場合、回答の結果に有意差が認められた〈項目21〉「文法的な正しさへの心配」、〈項目23〉「発音の心配」、〈項目25〉「聴解力への不安」では超級者に比べ中上級者に①「そう思う」という回答が多かったことから、「第二言語不安」は日本語能力と関わりが深いと思われる。しかし、その他の項目での不安は必ずこのような結果にはなっていないことから、「第二言語不安」の中でも言語能力と直接関係している項目と関係していない項目もあるのではないかとと思われる。この点については、データの量や調査項目の質にもよると思われるので、引き続き検討が必要であると思われる。

最後に第3の目的は、学習者の口頭発表場面に対する意識を、事前・事

中・事後活動という教育活動全体から把握し、スピーチ不安の考察や日本語教育への応用を考える際の参考とすることであった。一般に、発表・スピーチがうまくなるためには、場数をこなせばよい、という考え方があるが、今回の調査では経験の多い日本語母語話者や超級者でもスピーチ不安を感じていることから、スピーチ不安は単に経験を積むだけでは解消されないように思われる。また、超級者・中上級者という日本語学習者は、「日本語の正しさ」に対して不安を抱いていることから、学習者に対しては言語面で自信をもって口頭発表場面に望めるよう、事前準備を工夫する、あるいは事後活動で学習者の発表・スピーチを振り返る機会を作るなどして、今後の学習に生かせるような場が持てるようになるとよいと思われる。

教育への実践的な提案として、神部・井上（1997）では事前指導の必要性があげられている。本研究の調査では、中上級者は事前準備を負担に感じる傾向がみられたが、学習者の言語能力や、口頭発表場面の学習に費やすことができる時間的な制約なども考慮しながら、効果的な事前の指導方法について検討することが望まれる。マリオット（1999）はオーストラリアにおける日本人留学生のマクロ学習ストラテジーの研究であるが、仲間同士のネットワークを活用した事例として、口頭発表の練習の準備を友人やチューターの助けを借りて行うという例をあげている。このように、事前準備は教室内の、教師の管理下だけで行なわれるだけでなく、社会的ストラテジーを活用した自律学習も可能であろう。

ただし、指導の際に注意したいのは、学習者の「自他比較」の意識への対応である。日本語学習者にとって多くの人の前で「日本語の正しさ」について言及されることは、公的自意識に抵触する問題であろう。口頭発表場面の学習は、多くの人の前で評価されることが伴うため、学習者の人格を傷つけることがないように、教師は細心の注意をする必要があると思われる。Price（1991）は人前で話すことの不安への対策として、1対1の対話形式や、小グループでの活動を日々の学習に取り入れること、また学習

者に教室を「学びの場」「コミュニケーションの場」という意識を持たせることをあげている。不安をコントロールするということは、学習ストラテジーの中の情意ストラテジーと深い関係がある。心理的負担を調節しながら学習活動を構成して自信をもたせる、活動に対して肯定的な意識を持たせるなど、情意ストラテジーの活用は口頭発表場面の学習に有効であると思われる。

6. 今後の課題

口頭発表場面の教育に関する研究は、学習者の言語表現の分析や評価方法といった教師側の視点からの研究は多くなされているが、スピーチ不安など学習者の視点に立った研究例はまだ多くない。今回のような、学習者の意識を改めて調査研究をすることは、指導を考える上で有意義ではないかと思われる。今回の調査項目は、厳密な心理測定尺度を用いたものではなく、口頭発表場面の指導の基礎的な資料とするべく、大きな傾向を把握する目的で行った。また、母語と第二言語によるスピーチ不安の比較するためには、同じ対象者に2つの異なる言語を使用した場合での心理状態の比較をたずねるという方法も考えられるが、現実には2つ言語にわたって発表・スピーチができる言語能力のある被験者を探すことが難しいことから、今回は日本母語話者と日本語学習者を比較するという試験的な調査を行った。

今後の課題としては、データ数を増やしてパラメトリック検定で量的な検定を行うことがあげられる。また今回の調査では、中上級者に発表・スピーチを経験したことのない者も含まれていたことから、全員を経験者にそろえるなど、学習者に関する統制を厳しくした上で、様々な角度からの研究を進めていく必要があると思われる。一方で、スピーチ不安は学習者の心の中の問題であり、質問紙法による調査には限界があることも事実である。インタビューなどを通じて学習者の生の声を取り入れた質的な調査との融合など、研究方法の改善についても検討していきたい。またスピー

チ不安の問題は、学習者管理の問題と捉えることができるが、学習ストラテジーの活用も視野に入れながら、教育への応用を検討することも重要な課題と考える。そして最終的に、学習者の抱えるスピーチ不安を考慮しつつ、日本語教育における効果的な指導方法をさぐっていきいたいと考えている。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの日本語クラスの先生方、留学生・大学生・大学院生の皆様方に調査にご協力いただきました。この場を借りて、心からお礼申し上げます。また貴重なご意見をくださいましたモニターの方々にも感謝申し上げます。

参考文献

- Daily, J. (1991) Understanding communication apprehension: an introduction for language educators. In Horwitz & Young (Eds.), *Language anxiety*, Prentice-Hall. pp.3-13
- 市井雅哉 (1990) 「状態不安の自己報告指標と生理的指標の関連についての検討——スピーチ不安者を対象に——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』別冊第17集 哲学・史学編 早稲田大学大学院文学研究科 97-107頁
- 鎌田 修 (2001) 「レベル判定の実例—超級」『ACTFL-OPI 入門』アルク 52-65頁
- 神部秀一・井上健治 (1997) 「中学生のスピーチ不安に関する研究」『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』群馬大学教育学部 409-438頁
- 小泉晋一 (1997) 「スピーチ場面イメージの鮮明度にイメージ能力とスピーチ不安が及ぼす効果」『心理学研究』日本心理学会 203-208頁
- 近藤真治, ヤン・インリン (1996) 『コミュニケーション不安の形成と治療』ナカニシヤ出版
- マリオット, ヘレン (1999) 「学習ストラテジーとネットワークキング」『日本語教育と日本語学習——学習ストラテジー論にむけて』宮崎里司・J. V. ネウストプニー編 くろしお出版 197-208頁
- McCroskey, James C. (1982) Chapter2 Stage Fright: A Normal Problem In *An Introduction to Rhetorical Communication 4th Edition*, Prentice-Hall pp.23-38
- 宮前義和 (2000) 「スピーチ不安傾向の高い者の特徴——スピーチ不安傾向尺度を作成して——」『香川大学教育実践総合研究』香川大学教育学部編 165-179頁
- 元田静 (2000a) 「日本語学習者はどのような不安を感じているか——日本語レベルと滞日年数の観点から——」日本語教育学会春季大会予稿集 63-65頁

- 元田 静 (2000b) 「日本語不安尺度の作成とその検討——目標言語使用環境における第二言語不安の測定——」『教育心理学研究』第48巻 4 号 日本教育心理学会 422-432頁
- 元田 静 (2000c) 「目標言語使用環境における日本語学習者の第二言語不安——その内容と程度について——」『広島大学教育学部紀要』第二部 第49号 広島大学教育学部 213-221頁
- 岡部悦子・蒲谷宏 (2000) 「日本語学習者の口頭発表場面におけるスピーチレベルについて」『講座日本語教育』第36分冊 早稲田大学日本語研究教育センター 111-134頁
- 岡部悦子 (2002) 「口頭発表場面のスピーチレベルに対する日本語学習者・日本語母語話者の意識の比較——口頭発表場面の指導のための基礎的研究として——」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第47輯・第3分冊 早稲田大学大学院文学研究科 77-90頁
- 小河原義朗 (2001) 「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み——タイ人大学生の場合——」日本語教育論集『世界の日本語教育』第11号 国際交流基金日本語国際センター 39-53頁
- オックスフォード, レベッカ .L (1994) 『言語学習ストラテジー』 矢戸通庸・伴紀子訳 凡人社
- Price, M. L. (1991) The subjective experience of foreign language anxiety: interviews with high anxious students. In Horwitz & Young (Eds.), *Language anxiety*, Prentice-Hall. pp.101-108
- 下瀬川慧子 (1994) 「学部留学生に対する話し方教育の枠組み」『東海大学留学生センター30周年記念論集』 東海大学出版会 149-172頁
- 高橋俊三編 (1999) 『音声言語指導大事典』 明治図書出版
- 田中宏幸 (2001) 「高校のスピーチ実践上の問題点」『日本語学』 Vol.20, No.5 明治書院 79-87 頁

【資料】「口頭発表場面のスピーチ不安に関する調査項目、及び結果一覧」

◆回答方法: 4段階評定。(①そう思う、②ややそう思う、③あまりそう思わない、④まったく思わない)

ただし項目1については、以上の質問紙を作成した上で、以下の項目について回答を求めた。
(項目1) ①今まで一度もしたことがない ②日本語の授業で1〜2回ぐらいしたことがある ③日本語の授業でよくしたことがある ④大学のゼミや授業でよくしたことがある
(項目2) ①まったく必要がない ②ほとんど必要ない ③将来、勉強や仕事で必要になると思う ④現在、勉強や仕事で必要である
(項目3) ①まったく必要がないのでしたくない ②ほとんど必要ないが、日本語が上手になるために勉強したい
(項目4) ①将来、勉強や仕事で必要になると思うので学びたい ②現在、勉強や仕事で必要なので学びたい

「※」印のある項目は、超級者・中上級者のみを対象にした項目を示す。

◆対象者: 超級者、超級者・中上級者のみを対象にした項目を示す。 N: 日本語母語話者(Native) S: 超級者(Superior) AI: 中上級者(Advanced, Intermediate)

◆検定方法: 次の記号で示す。 K-W検定: クラスカル-ウォリス検定 M-W検定: マン-ホイットニー検定

◆有意水準: 次の記号で示す。 * : 有意水準10%で有意傾向 ** : 有意水準5%で有意 *** : 有意水準1%で有意

項目	内容	対象	①	②	③	④	合計	検定結果	多重比較
1	日本語で、発表・スピーチをしたことがありますか	N S AI	0 (0%) 0 (0%) 7 (29.2%)	4 (9.8%) 1 (4.5%) 6 (25.0%)	1 (2.4%) 5 (22.5%) 10 (41.7%)	36 (87.8%) 16 (72.2%) 24 (100%)	41 (100%) 22 (100%) 24 (100%)	K-W検定 $\chi^2=10.827 < 46.483$ *** ($p=0.001$, $df=2$)	N, S / AI
2	あなたがたとどいて、日本語で発表・スピーチをすることは、どのぐらい必要ですか	N S AI	1 (2.4%) 0 (0%) 1 (4.2%)	2 (4.9%) 0 (0%) 3 (12.5%)	11 (26.8%) 3 (13.6%) 16 (66.7%)	27 (65.5%) 18 (81.8%) 41 (100%)	41 (100%) 22 (100%) 24 (100%)	K-W検定 $\chi^2=10.827 < 15.870$ *** ($p=0.001$, $df=2$)	N / AI
3	あなたは、日本語で発表・スピーチをすることを勉強したいですか	N S AI	1 (2.4%) 0 (0%) 1 (4.2%)	2 (4.9%) 1 (4.5%) 3 (12.5%)	11 (26.8%) 3 (13.6%) 16 (66.7%)	27 (65.5%) 18 (81.8%) 41 (100%)	41 (100%) 22 (100%) 24 (100%)	K-W検定 $\chi^2=10.827 < 20.805$ *** ($p=0.001$, $df=2$)	N, S / AI
※4	日本語とあなたの母語とは、発表・スピーチのプレゼンテーションのスタイルがちがう	N S AI	1 (4.5%) 1 (4.2%) 1 (4.2%)	11 (50.0%) 11 (45.8%) 11 (45.8%)	8 (36.4%) 11 (45.8%) 14 (58.3%)	2 (9.1%) 1 (4.2%) 1 (4.2%)	41 (100%) 22 (100%) 24 (100%)	M-W検定 $-z0.05/2=-1.960 < -0.121$	
※5	日本語とあなたの母語とは、発表・スピーチの表現(言葉づかい)がちがう	N S AI	5 (22.7%) 1 (4.2%) 1 (4.2%)	11 (50.0%) 8 (33.3%) 14 (58.3%)	6 (27.3%) 14 (58.3%) 1 (4.2%)	0 (0%) 1 (4.2%) 1 (4.2%)	22 (100%) 24 (100%) 24 (100%)	M-W検定 $-z0.05/2=-1.960 > -2.643$ *	
※6	日本語とあなたの母語とは、発表・スピーチの構成がちがう	N S AI	1 (4.5%) 1 (4.2%) 1 (4.2%)	11 (50.0%) 5 (20.8%) 16 (66.7%)	10 (45.5%) 5 (20.8%) 2 (8.3%)	0 (0%) 1 (4.2%) 2 (8.3%)	22 (100%) 24 (100%) 24 (100%)	M-W検定 $-z0.05/2=-1.960 > -2.120$ *	
※7	日本語の発表・スピーチは、あなたの母語より敬語やあらたまった表現が多い	N S AI	6 (27.3%) 13 (54.2%) 5 (20.8%)	9 (40.9%) 5 (20.8%) 5 (20.8%)	6 (27.3%) 5 (20.8%) 1 (4.2%)	1 (4.5%) 1 (4.2%) 1 (4.2%)	22 (100%) 24 (100%) 24 (100%)	M-W検定 $-z0.05/2=-1.960 < -1.423$	
※8	日本語の発表・スピーチは、あなたの母語より間接的な表現が多い	N S AI	8 (36.4%) 10 (41.7%) 7 (29.2%)	9 (40.9%) 7 (29.2%) 5 (20.8%)	4 (18.2%) 6 (21.7%) 12 (54.5%)	1 (4.5%) 1 (4.2%) 8 (33.3%)	22 (100%) 24 (100%) 41 (100%)	M-W検定 $-z0.05/2=-1.960 < -0.23$	
9	日本語で発表・スピーチをするとき、自分の意見が伝われば日本語のスタイルにあってなくても構わない	N S AI	4 (9.8%) 1 (4.5%) 3 (12.5%)	9 (22.0%) 5 (22.0%) 5 (20.8%)	20 (48.8%) 12 (54.5%) 10 (41.7%)	8 (19.5%) 4 (18.2%) 6 (25.0%)	41 (100%) 22 (100%) 24 (100%)	K-W検定 $\chi^2=5.991 > 0.72$ ($p=0.05$, $df=2$)	
10	日本語で発表・スピーチをするとき、自分の意見が伝われば、文法や表現が正しくなくても構わない	N S AI	2 (4.9%) 0 (0%) 1 (4.2%)	5 (22.0%) 2 (9.1%) 9 (37.5%)	21 (51.2%) 10 (45.5%) 6 (25.0%)	13 (31.7%) 10 (45.5%) 8 (33.3%)	41 (100%) 22 (100%) 24 (100%)	K-W検定 $\chi^2=5.991 > 0.72$ ($p=0.05$, $df=2$)	

言語表現に関する項目

項目	内容	対象	①	②	③	④	合計	検定結果	多重比較
※11	日本語で発表・スピーチをするとき、母語で行う時よりも準備に時間がかかる	N	-	-	-	-	-	MW検定 $\chi^2=0.05/2=1.960 < -0.194$	
		S	11 (50.0%)	7 (31.8%)	3 (13.6%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	14 (58.3%)	4 (16.7%)	4 (16.7%)	2 (8.3%)	24 (100%)		
※12	日本語で発表・スピーチをするとき、まず母語で考えてから日本語に翻訳する	N	-	-	-	-	-	MW検定 $\chi^2=0.05/2=1.960 < -0.673$	
		S	0 (0%)	4 (18.2%)	14 (63.6%)	4 (18.2%)	22 (100%)		
		AI	0 (0%)	7 (28.2%)	13 (54.2%)	4 (16.7%)	24 (100%)		
13	日本語で発表・スピーチをするとき、日本語の資料を聞いたり読んだりすることが負担になる	N	3 (7.3%)	9 (22.0%)	18 (43.9%)	11 (26.8%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=4.805 < 4.881 \uparrow$ ($p=0.1$, $df=2$)	
		S	0 (0%)	7 (31.8%)	13 (59.1%)	2 (9.1%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	8 (33.3%)	10 (41.7%)	2 (8.3%)	24 (100%)		
14	日本語で発表・スピーチをするとき、日本語をまねがえないうように、話すことはすべて紙に書いておく	N	3 (7.3%)	13 (31.3%)	18 (43.9%)	7 (17.1%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=4.805 < 5.462 \uparrow$ ($p=0.1$, $df=2$)	
		S	3 (13.6%)	10 (45.5%)	8 (36.4%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	7 (29.2%)	8 (33.3%)	6 (25.0%)	3 (12.5%)	24 (100%)		
15	ふだんから、日本語で話すときは緊張する	N	6 (14.6%)	18 (43.9%)	13 (31.7%)	4 (9.8%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 < 9.977 *$ ($p=0.05$, $df=2$)	AI / S
		S	1 (4.5%)	5 (22.7%)	13 (59.1%)	3 (13.6%)	22 (100%)		
		AI	9 (37.5%)	8 (33.3%)	5 (20.8%)	2 (8.3%)	24 (100%)		
16	多くの人の前で日本語で話すときは緊張する	N	22 (53.7%)	13 (31.7%)	5 (12.2%)	1 (2.4%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 < 6.230 *$ ($p=0.05$, $df=2$)	N / S
		S	4 (18.2%)	12 (54.4%)	5 (22.7%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	10 (41.7%)	8 (33.3%)	5 (20.8%)	1 (4.2%)	24 (100%)		
17	日本語の発表・スピーチでは、自分の意見をはっきり言わなければならない	N	4 (9.8%)	8 (19.5%)	21 (51.2%)	8 (19.5%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 2.964$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	2 (9.1%)	2 (9.1%)	18 (81.8%)	0 (0%)	22 (100%)		
		AI	1 (4.2%)	10 (41.7%)	12 (50.0%)	1 (4.2%)	24 (100%)		
18	日本語の発表・スピーチでは、自分の言いたいことをうまく説明することができない	N	6 (14.6%)	16 (39.0%)	17 (41.5%)	2 (4.9%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 1.222$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	1 (4.5%)	8 (36.4%)	13 (59.1%)	0 (0%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	6 (25.0%)	11 (45.8%)	3 (12.5%)	24 (100%)		
19	日本語で発表・スピーチをするとき、自分の性格(パーソナリティ)はかわってしまう	N	6 (14.6%)	15 (36.6%)	17 (41.5%)	3 (7.3%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=4.805 < 4.871 \uparrow$ ($p=0.1$, $df=2$)	
		S	1 (4.5%)	6 (27.3%)	14 (63.6%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	0 (0%)	8 (33.3%)	11 (45.8%)	5 (20.8%)	24 (100%)		
20	日本語で発表・スピーチをするとき、よく準備している途中で頭が混乱してしまう	N	8 (19.5%)	20 (48.8%)	11 (26.8%)	2 (4.9%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=10.827 > 1.424$ ($p=0.05$, $df=2$)	S, AI / N
		S	2 (9.1%)	11 (50.0%)	8 (36.4%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	9 (37.5%)	9 (37.5%)	2 (8.3%)	24 (100%)		
21	日本語で発表・スピーチをするとき、文法的に正しい日本語を話せるかどうか心配する	N	4 (9.8%)	8 (19.5%)	15 (36.6%)	14 (34.1%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 2.744$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	3 (13.6%)	13 (59.1%)	5 (22.7%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	5 (20.8%)	11 (45.8%)	5 (20.8%)	3 (12.5%)	24 (100%)		
22	日本語で発表・スピーチをするとき、どちらで止まらずに日本語を話せるかどうか心配する	N	4 (9.8%)	18 (43.9%)	13 (31.7%)	6 (14.6%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=10.827 > 13.639 ***$ ($p=0.001$, $df=2$)	S, AI / N
		S	0 (0%)	9 (40.9%)	12 (54.5%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	3 (12.5%)	13 (54.2%)	6 (25.0%)	2 (8.3%)	24 (100%)		
23	日本語で発表・スピーチをするとき、正しい発音で日本語を話せるかどうか心配する	N	1 (2.4%)	11 (26.8%)	12 (29.3%)	17 (41.5%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=10.827 > 13.639 ***$ ($p=0.001$, $df=2$)	S, AI / N
		S	2 (9.1%)	15 (68.2%)	4 (18.2%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	9 (37.5%)	7 (29.2%)	4 (16.7%)	24 (100%)		

事前活動に関する項目

事中・事後活動に関する項目

事 中 ・ 事 後 活 動 に 関 する 項 目

項目	内 容	対 象	①	②	③	④	合 計	検定結果	多重比較
24	日本語で発表・スピーチをするとき、日本人から日本語が下手だと思われないか心配する	N	3 (7.3%)	15 (36.6%)	7 (9.5%)	15 (36.6%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 4.412$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	2 (9.1%)	12 (54.5%)	8 (31.8%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	6 (25.0%)	10 (41.7%)	4 (16.7%)	24 (100%)		
25	日本語で発表・スピーチをするとき、他の留学生から日本語が下手だと思われないか心配する	N	2 (4.9%)	11 (26.8%)	11 (26.8%)	17 (41.5%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=4.605 < 5.686 \uparrow$ ($p=0.1$, $df=2$)	
		S	1 (4.5%)	10 (45.5%)	9 (40.9%)	2 (9.1%)	22 (100%)		
		AI	6 (25.0%)	5 (20.8%)	7 (29.2%)	6 (25.0%)	24 (100%)		
26	日本語で発表・スピーチをするとき、先生から日本語が下手だと思われないか心配する	N	6 (14.6%)	16 (39.0%)	12 (29.3%)	7 (17.1%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 0.944$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	1 (4.5%)	11 (50.0%)	8 (36.4%)	2 (9.1%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	3 (12.5%)	15 (62.5%)	2 (8.3%)	24 (100%)		
27	日本語で発表・スピーチをするとき、まちがった日本語を話していると感じて不安になる	N	7 (17.1%)	19 (46.3%)	11 (26.8%)	4 (9.8%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 0.000$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	2 (9.1%)	10 (45.5%)	8 (36.4%)	2 (9.1%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	11 (45.8%)	5 (20.8%)	4 (16.7%)	24 (100%)		
28	日本語で発表・スピーチをするとき、聞き手が自分の日本語を理解してくれているかどうか心配する	N	12 (29.3%)	24 (58.5%)	4 (9.8%)	1 (2.4%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=10.827 < 11.160 \quad ***$ ($p=0.001$, $df=2$)	N / S, AI
		S	3 (13.6%)	10 (45.5%)	8 (36.4%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	2 (8.3%)	11 (45.8%)	10 (41.7%)	1 (4.2%)	24 (100%)		
29	日本語で発表・スピーチをするとき、内容や自分の考えが伝達されると不安になる	N	10 (24.4%)	12 (29.3%)	18 (43.9%)	1 (2.4%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 3.889$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	1 (4.5%)	9 (40.9%)	12 (54.5%)	0 (0%)	22 (100%)		
		AI	1 (4.2%)	9 (37.5%)	10 (41.7%)	4 (16.7%)	24 (100%)		
30	日本語で発表・スピーチをするとき、準備していないことを質問されると緊張する	N	19 (46.3%)	12 (29.3%)	9 (22.0%)	1 (2.4%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 2.750$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	4 (18.2%)	13 (59.1%)	5 (22.7%)	0 (0%)	22 (100%)		
		AI	8 (33.3%)	6 (25.0%)	9 (37.5%)	1 (4.2%)	24 (100%)		
31	日本語で発表・スピーチをするとき、準備していないことを質問されるといいたいことがうまく言えない	N	10 (24.4%)	18 (43.9%)	12 (29.3%)	1 (2.4%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 3.273$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	2 (9.1%)	14 (63.6%)	5 (22.7%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	4 (16.7%)	6 (25.0%)	14 (58.3%)	0 (0%)	24 (100%)		
32	日本語で発表・スピーチをするとき、何回書いてもわかってもらえないときがある	N	11 (26.8%)	15 (36.6%)	14 (34.1%)	1 (2.4%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=5.991 > 1.821$ ($p=0.05$, $df=2$)	
		S	3 (13.6%)	7 (77.3%)	1 (4.5%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	3 (12.5%)	13 (54.2%)	5 (20.8%)	3 (12.5%)	24 (100%)		
33	日本語で発表・スピーチをするとき、他人からの質問が聞き取れず、どうしていいかわからなくて不安になる	N	5 (12.2%)	10 (24.4%)	15 (36.6%)	11 (26.8%)	41 (100%)	KW検定 $\chi^2=9.210 < 10.302 \quad **$ ($p=0.01$, $df=2$)	AI / S
		S	2 (9.1%)	6 (27.3%)	13 (59.1%)	1 (4.5%)	22 (100%)		
		AI	8 (33.3%)	9 (37.5%)	6 (25.0%)	1 (4.2%)	24 (100%)		

事 中 ・ 事 後 活 動 に 関 する 項 目